

上田女子短期大学学術研究所報創刊に当たって

上田女子短期大学学術研究所報の創刊号を上梓した。本学教員の研究発表の場の主要なひとつであり、学内外に広く読まれ、活用されることを念じて已まない。

本学の学内研究機関として「上田女子短期大学学術研究所」を2021年9月に立ち上げた。

固より高等教育機関として、本学には幼児教育学科に属する児童文化研究所及び総合文化学科に属する総合文化研究所が併存し、夫々の所管分野に就いての調査研究を行う機関として機能してきたのであるが、今般、両者を統合一本化し、学術研究所を新組織として発足させたものである。

この統合の狙いは単に2つの組織を一本化して効率化を図ることに留まらず、新たなミッションも加わることになった。即ち、現代は学問や研究が高度化するに連れてより専門化し、その分野の研究者以外、所謂部外者からは窺い知れぬ様相を呈するようになったとの認識がある。無論、専門化、深化は研究の必然する処であるが、分野間に相当の距離感が生じたことに伴い、近年、その弊害も論じられるようになってきた。その弊害を些かでも払拭し、分野間の隙間を埋める、乃至、異なる分野間の連携を促進する活動に、地域に根ざす短期大学である本学の持つ知見を役立てることは、コミュニティへの知的貢献という使命を果たすことに他ならないと確信する。

就而、専門を極める研究と併行して学際的な研究、そしてそれを地域のコミュニティや住民の理解しやすい形にして、更にその実践にも役立つような啓蒙活動に展開していくことが望まれる所以である。その観点に立ち、この「学術研究所報」が目的実現に大いに貢献してくれることを切望する次第である。又、もう一つの狙いとして、これが本学の学生にも多く参照されることも期待したい。

創刊号として10編余の論文等が寄稿されている。向後、上述したような分野を超えての共同研究や論文の執筆に本学の教員の努力がこれまで以上に注がれることを期待すること切である。

私事にして余談乍ら、迂生は20年余に亘りイグ・ノーベル賞に関心を持ち、又、その研究発表の内容を楽しんで来た。とかく、学問、研究が専門家の独占になりつつ在る状況下、一般人の関心を引くユーモラスで面白く且つユニークな題材が、実はノーベル賞級の研究手法、努力によって、立派な研究として開花している。而も、これらのうち明日のノーベル賞に繋がる研究も多数包含されているということも研究者の意欲をかき立て刺激に成っている。

この所報に掲載される論文や研究ノートなど、日頃の研究成果が更に大きく発展するための基礎、土台になることも夢として持ちつつ、そのことを大いに願っている。

学長 小池 明